

我が研究生生活

—平安朝研究四十五年(二)—

山中 裕

一

一九八九年、長谷川教授・小口助教より弘前大学の集中講義に招かれたのは、梅雨のまだ開けやらぬ七月のはじめだった。

弘前は、まだ、はじめてのところで、喜びと期待に胸をはづませながら、梅雨寒むともいうべき朝、東京を発っていった。弘前は東京より天気はよかった。が、七月というのに、まだうすら寒いという感じだった（まもなく、翌日から暑く夏らしくなったが）。一週間、若い学生諸君と一日をともにし、「摂関政治の本質と意義—藤原道長を中心として—」の題のもとに講義し、心地よくすごした。真面目で熱心な学生諸君の前で、私は大変楽しく、思う存分、摂関政治について講義を果した。本当によき想い出である。長谷川・小口両氏は、まことによく世話をしてくされ、最終日の講義は、私の「摂関政治」を国史研究会の公開講演とされ、一般公開のかたちで開催して下さった。重ねがさね長谷川・小口両氏に感謝したい。

さて、その際、小口氏より、私の平安時代研究の経過について、特に古記録に対しての研究を中心に、その想い出のようなものを書いてはいるかがという勧誘をうけた。私も研究を始めてから四十年を過ぎており、

ここにおいて、そのような研究歴を書かせていただくのもよい機会とおもい、いつか自分も日記風にまとめてみたいとおもっていたので、恥かしさも顧みず、早速、書かせていただくことにした。

二

まず、私は坂本太郎先生のもとで卒業論文の御指導をうけ、大学院も坂本先生のゼミで勉強し、史料編纂所へ入所したのも、坂本先生の御推薦によってである。坂本先生には本当にお世話になり、御生前中には、度々お宅へうかがい、御指導をうけたものである。私の卒業は昭和十八年秋（この当時、大学は九月卒業だった）。まもなく坂本先生のもとで、『令義解』『日本三代実録』の演習に入り、『令義解』では、一年先輩に井上光貞氏がおられ、大学院の坂本先生の演習は、井上氏と二人のみであった。井上氏が休まれたりしたときは私一人だったが、一人でも坂本先生は熱心に御指導して下さい、私一人ではなかなか御質問されることに返答出来ず、よく叱責をうけたことであった。

しかし、此頃から私は、卒業論文が「藤原道長」であったこともあって、『御堂関白記』や『栄花物語』を読みたいという衝動が強く、特に他の古記録類（小右記・権記）をも早くしっかりと理解できるようにになりたいという気持ちでいっぱいだった。その当時、戦前と戦後まもない頃は、平安時代の古記録を読むなどという研究会もなく、自分一人で、こつこつと読むよりはか方法がなかった。そして分らぬ部分を坂本先生をはじめ、何人かの先輩に少しづつ御教示していただくことをする

しか仕方なかったのである。そもそも私が平安時代の研究にとり組んだのは、当時撰関政治の研究というものが、割合に立ち遅れているかのような感があつたからで、その解明のためには、藤原道長の研究こそ重要であると考えたからである。

昭和二十年四月、東京帝国大学文学部史料編纂所に入所。はじめは、古文書部の相田二郎先生のもとに入った。この頃史料編纂所は、空襲を避けるために、信州の伊那と上田とに一部の職員が貴重な史料とともに疎開しており、数人の人々は家族とともに家をもって、そちらで仕事をしていた。私が入所した二十年四月というのは、ちょうど三月九日の夜、東京に大空襲があつた直後であつた。その大空襲では赤門の近くの本郷薬局まで焼けてしまつており、史料編纂所でも史料を早く疎開しなければというので大騒ぎになり、私が入所したときは、その疎開作業もいよいよ完了するところであつた。私も入所したてで張り切つて一生懸命に荷物を運び、働いたところ、逆に、三、四日で病気になる、早速休んでしまった恥ずかしい経験を懐かしく想い出している（その頃、私はぜんそくがひどく大変不健康であつた）。

さて、重要な史料をほとんど疎開してしまつた後の史料編纂所の仕事では、残つた多数の古文書類の影写本について複本を作つておこうという作業に忙しかつた。もし焼失してしまつたときでも、複本が残ればというので、影写本を、全員でそのまま書きとつたのである（それらは現在でも史料編纂所の書庫にしまつてある筈である）。

やがて終戦になり、疎開していた人々も帰京してくると、またもとのように大日本史料、大日本古文書、大日本古記録といった仕事が復活し

た。早速私は、大日本史料第二編に配属され、西岡虎之助先生・桃裕行氏のもとで仕事をする事となつた。これらの史料編纂所の仕事のうち、大日本史料および大日本古文書は、明治・大正・昭和と多くの出版があつたが、大日本古記録はまだ室が出来たばかりで、いよいよこれから出版をはじめるところであつた。そこで古記録室の拡充ということとなり、私は桃氏とともに二編より古記録部第一室へ移つたのである。古記録部ははじめ竹内理三・村田正志・花田雄吉の三氏で仕事をしておられたが、終戦後、竹内氏は九州大学へ移られ、また村田氏は大日本史料編年室へ移つておられ、当時は森末義彰氏を部長に桃室長、花田氏、斎木一馬氏、白井信義氏等の先輩をはじめ、私、その他の人々が構成されていた。昭和二十三年のことである。それより十九年間、古記録部で『御堂関白記』『九曆』『小右記』（はじめの四冊まで）などの編纂校訂を、桃氏の指導のもとにつづけた。

さて、古記録部の最初の仕事は、『御堂関白記』である。昭和二十五年、『御堂関白記』の出版のため、同書の原本を拝観に、桃氏と京都陽明文庫へ出張した。これが私の『御堂関白記』の原本に接することができた初である。初めて拝観した『御堂関白記』が、千年も前のものであるにもかかわらず、あまりにもきれいに、虫損・破損もそれ程なく保管されていることに先ず驚き、二週間、一生懸命に原本の『御堂関白記』と原稿を校合してゆくことに光栄と喜びを感じ、まったく感動の連続の日々であつた。

帰京後は懸命に原稿の完成に邁進した。大日本古記録の『御堂関白記』は三冊本であり、その第一冊は、昭和二十七年三月の発行だった。原本

を拝観したときの感激はいつまでも忘れられなかったが、それとはうらはらに期限を約束された原稿完成は本当に大変だった。昭和二十六・二十七・二十八年度と三年続いての出版はまことに苦しく、森末教授の、その出版期限は何がともあれ絶対に遵守せよとの命令のままに、無我夢中に桃氏と完成を急いだことは忘れられない。この間、毎夜、原稿を家に持って帰り、夜更け、十二時すぎまで原稿づくり・校正をやったことは、苦しい中にも若かりし頃の想い出となって、今も眼に浮かんでくる。先輩のことで恐縮ではあるが、桃氏もこの間、毎夜九時頃まで史料編纂所の古記録室に残って仕事を続けられた。ちょうど斎木一馬氏（先日故人となられた。全三巻の著作集が、吉川弘文館より最近出版された。①『古記録の研究』上、②『古記録の研究』下、③古文書の研究）も、夜遅くまで同じく史料の古記録室に残って研究と仕事を進められておられたため、桃氏は斎木氏と仲よく遅くまでのこり、自身の担当する御堂関白記完成のために懸命になっておられたのである。『御堂関白記』出版の最終年、二十八年度の頃には、「御堂地獄」などという言葉も史料編纂所の中の誰かによって作られたという戯談もある。

さて、こうして『御堂関白記』は終わったが、その後、桃氏は『貞信公記』に、私は『九曆』にとりかかった。古記録部の部長も森末教授から川崎庸之教授にかわった。

『御堂関白記』はとにかくがむしゃらにやったが、これからは年次計画を前もってしっかり建ててやっつていこうとの川崎教授の方針によって、古記録部では五年先の計画まで建てられた。その後は、多少の余裕が出来、『九曆』も、なかなか大変ではあったが、『御堂関白記』のときよ

りも大分落着いて仕事をする事が出来るようになった。

『貞信公記』は桃氏が原稿を作成され、私が初校の校正をお手伝いし、『九曆』は私が原稿を作り、桃氏が校正をして下さるとともに、室長としてのいろいろのまとめもやって下さった。

なお古記録第一部には、桃・山中二人のほかに近衛通隆氏がおられ、近衛氏は川崎氏とともに、三冊の『後二条師通記』を完成された。

（古記録第二部には、斎木氏のほか、田中健夫・菊地勇次郎氏などがおられたが、後に田中・菊地両氏は編年部へ移られ、小坂茂吉・新田英治両氏が来られた。第二部については記憶もさだかでないため、省略する。以上は三十五年頃までのことである）

昭和三十五年頃より後のことについては、また次の機会に述べることとする。

以上は、史料編纂所入所るときより助手時代の私の想い出を主にまとめたものであるが、昭和四十年助教、同四十四年教授に就任し、同五十六年定年退官した。この間、実に三十六年、多くの想い出が、喜びも悲しみも幾年月という具合に、今になっては次々と湧き出してくる。今回はここに、昭和三十五年頃までのことを述べたが、同じ頃の私個人の研究生活についても少々述べておきたい。

昭和十八年、卒業と同時に大学院に入ったが、卒業生の大部分の人は兵隊に行き、大学院へ入ることが出来たのは私一人だった。私はその頃から年中行事の研究をはじめており、大学院の論文では「白馬節会について」を坂本先生に提出した（後、昭和二十六年六月、改訂して「日本歴史」三七号に掲載）。この当時、坂本教授のもとで『三代実録』の演習の影響を受けたためであろう、私は、六国史の年中行事、儀式に関し

て興味をもち、カードに採ったりしており、それらを『西宮記』『北山抄』『江家次第』などと比較検討するといった、いわゆる年中行事儀式に関する史料の蒐集を行っていた。しかしそれらも昭和二十年三月九日夜の大空襲ですべて焼失してしまった。

二十年四月、史料編纂所に入所後は、平安期の古記録、即ち、『御堂関白記』『小右記』『権記』などを懸命になって私的に読んでいたが、ただ初めのうちは、史料の書庫にある文献史料を次々と見て行くことが嬉しくて、そのようなことをして過した。

さて、その当時の国史の分野では、一年先輩に井上光貞・関晃・山田英雄氏等の優秀な方々があり、一年後輩には永原慶二・安田元久・山口啓二氏等がいて、井上光貞氏をはじめ、彼等は戦後まもなくより次々と研究論文を発表していた。私も桃氏をはじめ何人かの先輩から早く研究発表をするようにと忠告をうけていたが、最初は史料編纂所に入ったことに最大の喜びを感じて職場に慣れるということが第一と考え、書庫から多くの史料文献を自分の室に出してきて見ていくというこのみに精力をそそいでいた。

そこで私の研究発表のはじめは、先にも述べたように昭和二十六年のことである。先ず、「白馬節会」（『日本歴史』）をはじめとして、前々から好きであった国文学方面、特に『源氏物語』を歴史的に見ていこうという関心が強かったため、古記録類、『御堂関白記』や『小右記』を史料として、「国語と国文学」誌上に同じく昭和二十六年、「源氏物語の成立年代についての一考察」を出した。こうして以後、しばらく私は、年中行事と『源氏物語』および『栄花物語』の研究を少しずつ発表して

いった。いづれも撰関政治、藤原道長を中心に、基礎作業としての研究である。そして昭和三十一年、川崎氏の編による『日本人物史大系』の平安朝の部が一冊で刊行され、その中に「藤原道長をめぐる人々」を出したが、これこそ歴史家として、自分の最も望む仕事であった。また、小学館が『日本文化史大系』を出し、その中の平安朝の部に「年中行事」の項を、川崎・井上両氏のはからいによって入れることができたのである。

こうしてしばらく歴史と国文の中間のようなような研究を続けてきた私は、『九曆』（大日本古記録）の校訂・編纂をやってきたおかげで師輔・実頼、いわゆる九条家と小野宮家の研究も始めることが出来、それらの発表の初めは「九曆及び九条年中行事」（『国史学』六八号、昭和三十三年三月）である。

以上が、三十五年頃までの公私にわたる想い出である。三十六年以後は、また機会を新たに述べていきたい。

（関東学院大学文学部教授）